

<実践報告>

中学生を対象とした自画撮り被害に対する予防としての情報モラル教育の実践

原田恵理子・田邊昭雄・北 貢匡
(東京情報大学)

The Practice of Information Ethics Education to prevention for junior high school
students against self-portrait damage

ERIKO HARADA・AKIO TANABE・MITUTADA KITA
Tokyo University of Information Sciences

キーワード：中学生 自画撮り被害 予防教育 情報モラル教育

KEYWORDS : junior high school students, self-portrait damage, preventive education
information ethics education

抄録

本実践は、自画撮り被害に焦点化した情報モラル教育を中学校全体に行い、自画撮り被害の予防に対する教育効果を明らかにした。SNS等のメリットとデメリット、自画撮りのトラブルと被害事例、予防と対策といった内容で行った。その結果、講演内容の理解度と積極的な参加は3年生、SNSの理解度は3年生女子、講演内容の理解度と積極的な参加は2年生女子が高かった。さらに、自画撮り被害で大事にしたい単語は、授業内容で取り上げたことに関連付けられ、「位置(情報)」は学年進行とともに、「友達」は全学年の女子であげられた。今後気を付けたいことは学年・性別に差はなく、授業内容のポイントがおさえられていた。本実践は、中学生に適切な内容であるが、特に、3年生と2・3年生女子に高い効果が期待できることが示唆された。

1. はじめに

中学生のスマートフォンの所持率は、平成29年の54.6%から1年間で16%も増加して平成30年には70.6%となり(総務省, 2019)、中学生の多くが中学校入学を契機に所持する状況となった。その目的の一つとして、動画やオンラインゲームの利用以外に、LINEやTwitterでコミュニケーションをすることが挙げられる(総務省, 2019)。このようにスマートフォンの所有・利用状況の増加に伴う中、インターネットに関する啓発や学習を92.9%の生徒が経験する一方、SNSに起因する事犯の被害件数は増加傾向にあり、13歳と15歳の年齢が最も多く、中学生と高校生が大半を占めると報告されている(警察庁, 2018)。

なかでも児童ポルノの自撮り被害は毎年増加しており、平成29年には前年より35人増加して515人となり、その半数以上が中学生である（警察庁, 2018）。そのような状況における生徒用の予防対策として文部科学省（2018）が、「個人情報（写真を含む）を載せない、送らない」という標語でやりとりからトラブルに巻き込まれる危険性について「スマホ時代のキミたちへ」という小中学生用リーフレットを配布している。さらに2019年度版では、裸に近い写真は悪用される可能性があるると具体的に挿絵を用いてその危険性を訴えるリーフレットになっている（文部科学省, 2019）。警察庁では子どもの性被害の視点から自撮り被害の実態を漫画でわかりやすく解説し、被害に遭わないようにするための対応をHP上で掲載している（参照 https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/no_cp/newsrelease/2017_selfy_2.pdf）。最近では、自撮りという言葉を用いて実際の危険な事例や手口を説明した警察庁と文部科学省（2019）の合同リーフレットもある。

このような啓蒙活動が中学生に対して行われてはいるものの、残念ながら子どもたちは自撮り被害に対する知識や対応策を身につけているとは言い難い状況にあり、学校教育現場では教師が被害対応や予防教育、指導に困難を抱えている現状がある。なぜなら、多くの中学校は、スマートフォンや携帯電話の持ち込みや使用が認められていないために、SNSの利用状況の把握やその場での指導・介入は難しく、また、教師のSNS等の知識やトラブルに対応するスキルの不足や、教材や予防プログラム、指導体制が構築されていないため、生徒への指導や予防教育は大きな課題となっているからである（西野・原田・若本, 2018）。これについて警察庁（2018）は、被害児童生徒の5割弱が学校でSNSに関する指導を「受けたことはない」または「わからない、覚えていない」と報告している。

これまでの中学生を対象とした情報モラル教育の実践研究においても、問題解決能力（玉田, 2018）、ネット依存（酒井・塩田, 2018）、トラブル行動の自覚（酒井・塩田・江口, 2015）を対象としたものはあるが、自撮り被害の予防教育については行われていない。加えて、いずれの研究においても生徒の実態や発達段階に応じたプログラムを開発し、専門の知識を持つ人が教育課程における授業で実施していない。

そこで本実践報告では、中学校の全校生徒を対象に情報科の免許取得を目指す教職課程学生が自撮りの予防教育を行った授業の内容とその効果を報告することを目的とする。

2. 方法

対象者 中学校1年生62名（男子36名、女子26名）、2年生70名（男子33名、女子37名）、3年生69名（男子33名、女子36名）の計201名（男子102名、女子99名）のうち欠損値を除いた者を尺度ごとの有効回答とした。

調査方法 問1「SNS使用の理解度」、問2「自撮りの危険性の理解度」、問3「講演内容の理解」、問4「講演会への積極的な参加」について4件法、問5「自撮り被害に対してあなたが大事にしようと思ったことはどのようなことか」、問6「これから気を付けたいことはどのようなことか」は自由記述で生徒に回答させた。その際、各クラスの担任教師が

データは本研究の目的以外に使用しないこと、個人情報等を厳重に管理すること、本調査への協力は成績等には一切関係しないことを伝えた上で調査への回答が求められた。なお、調査にあたっては東京情報大学心理・教育コース倫理審査委員会で承認を受け、学校長の了解を得て行われた。

授業実施者 高校情報科の免許取得を目指す教職課程学生3年生3名。

授業概要 2018年6月、総合的な学習の時間(50分)に全校生徒を対象に体育館で講演会が実施された。「自画撮りによるトラブルがおき対応の必要性があるため、情報学を専門に学び教員を目指す学生に講演をしてほしい」という学校長の依頼に基づき、実施内容は、性的被害に加えて中学生が実際に起こした自画撮りに関するトラブルと犯罪被害に対する予防教育とした。その内容は情報学を学ぶ学生8名、大学教員2名で検討し、予防を目的としたSNS等のメリットとデメリット、自画撮りによる実際のトラブルと被害に関する事例とその予防・対処方法で構成した。授業者が一方向的に話すのではなく、クイズ形式、中学生の被害事例を自分事として考えてもらいつつ主体的に参加できる場面を設け、関心を持って授業に参加してもらえよう工夫された(表1)。

表1 自画撮り被害の予防教育の進め方

	時間	内 容
導入	5分	自己紹介 スマホ所持、SNS利用の状況を生徒に尋ねる
展開	5分	SNSとは何か
	5分	インターネットの光と影<クイズ形式>
	20分	事例紹介<クイズ形式> ①アップした自画撮りの顔写真が無断で加工して使用される ②自画撮りから見知らぬ人と知り合い犯罪に巻き込まれる ③自画撮りから個人や住所などが特定され犯罪に巻き込まれる ④自画撮りから個人が特定されストーカー被害にあう
	7分	被害に巻き込まれないための予防 被害に巻き込まれた時の対処方法
終末	3分	まとめ

3. 結果と考察

本研究で実施した講演会の効果を検討するため、各学年と学年別性差で t 検定を行った。その結果を表2と表3に示す。

学年差では、講演内容の理解度 ($t(130) = 1.49, p < .05$) と講演会への積極的な参加 ($t(138) = 2.48, p < .05$) で有意な差が認められ、講演内容は、3年生の理解度が高く、また積極的に参加していることが明らかとなり、3年生にとって本プログラムは適切な内容であったと考えられた。また、学年別性差では、SNS使用の理解度 ($t(68) = 2.09, p < .05$)、講演内容の理解度 ($t(70) = 2.40, p < .05$)、積極的な参加 ($t(69) = 2.12, p < .05$) で有意な差が認められ、SNSの理解度では3年生の男子より女子が、講演内容の理解度と積極的な参加は2年生の男子より女子が高く、2・3年生の女子に有効なプログラムであることが推測された。自画撮りの危険性の理解度は学年及び学年別性差において差がないことに加え、3.6以上の高い平均得点からも学年と性差に関係なく全ての生徒に理解しやすい内容であったと考えられた。

表2 学年差によるt検定

学年 人数	学年			1・2年生 t値 (n=132)	2・3年生 t値 (n=139)	1・3年生 t値 (n=131)
	1年生 (n=62)	2年生 (n=70)	3年生 (n=69)			
問1. SNS使用の理解度	3.68 (0.56)	3.69 (0.69)	3.83 (0.56)	.03	1.34	1.49
問2. 自画撮りの危険性の理解度	3.7 (0.71)	3.76 (0.55)	3.81 (0.57)	0.54	0.60	1.04
問3. 講演内容の理解度	3.56 (0.73)	3.66 (0.59)	3.79 (0.59)	0.88	1.30	2.00*
問4. 積極的な参加	3.3 (0.7)	3.16 (0.72)	3.46 (0.72)	1.25	2.48*	1.34

下段()内は標準偏差 * $p<.05$.

表3 学年別性差によるt検定

	学 年						1年生男女 t値 (n=62)	2年生男女 t値 (n=70)	3年生男女 t値 (n=69)
	1年生		2年生		3年生				
性別(人数)	男(n=36)	女(n=26)	男(n=33)	女(n=37)	男(n=33)	女(n=36)			
問1. SNS使用の理解度	3.67 (0.48)	3.69 (0.68)	3.61 (0.66)	3.76 (0.72)	3.70 (0.77)	3.97 (0.17)	.12	.91	2.09*
問2. 自画撮りの危険性の理解度	3.75 (0.44)	3.62 (0.98)	3.87 (0.70)	3.87 (0.35)	3.70 (0.77)	3.94 (0.23)	.73	1.73	1.84
問3. 講演内容の理解度	3.50 (0.51)	3.62 (0.98)	3.48 (0.71)	3.81 (0.40)	3.67 (0.78)	3.92 (0.28)	.60	2.40*	1.81
問4. 積極的な参加	3.31 (0.58)	3.27 (0.67)	2.97 (0.85)	3.32 (0.53)	3.36 (0.78)	3.56 (0.65)	.23	2.12*	1.11

下段()内は標準偏差 * $p<.05$

次に、講演会の内容が生徒にどのくらい理解されたかを検討するため、自画撮り被害に対して大事にしたいこととこれから気を付けたいことについて、学年と性別によるテキストマイニングを行った。その結果について、上位10位までを表4と表5に示す。

自画撮り被害に対して大事にしたいことは、「自画撮り」「SNS」「個人」「情報」が全ての学年で頻出され、「位置(情報)」といった予防のポイントは学年進行とともに、「友達」は全ての学年の女子で見られた。全ての学年で自画撮り被害における理解のポイントである「SNSの理解」「個人情報」「情報の扱い方」に関連付けられており、特に3年生では使用度の高さが予測されることから、「位置情報」が予防になるといったリテラシー理解も深まったと考えられた。また、女子は「友達」という単語が頻出語であるのに対して男子はなしということについては、この時期、特に女子においては、仲間関係が密着するチャム・グループの影響が反映され、自分だけでなく友だちを巻き込む、あるいは友達が巻き込むことがあるといったことに気づいたのではないかと推察され、男子は女子ほど友達関係を重視せず、自分のことを中心に考える傾向(榎本, 2000)があったのではないかと考えられた。これから気を付けたいことでは、学年や性別では頻出語に差は見られず、男子はネット、インスタ、Twitterと具体的な名前を出し、男女ともにSNSにおける予防のポイントに関わる語彙を挙げ、今後活かして被害を予防する意欲が述べられる傾向にあった。さらに、3年生のみ「友達」という単語がなく「自分」が上位にあることから、SNSの使用の自己責任について友達という身近で狭い世界から世の中とつながる広い世界に視点を向けて、個人の判断で責任ある行動をすることが意識されたのではないかと考えられた。

表4 「自画撮り被害に対して大事にしたいこと」における学年・男女の頻出語

	1年(185)		2年(198)		3年(235)		全体(599)	
	男子(103)	女子(82)	男子(92)	女子(106)	男子(112)	女子(123)	男子(320)	女子(279)
1位	写真	自分	自画撮り	写真	写真	自画撮り	写真	写真
2位	人	写真	情報	SNS	自分	情報	自画撮り	SNS
3位	自画撮り	SNS	自分	友達	情報	SNS	自分	情報
4位	自分	友達	写真	情報	SNS	写真	情報	自画撮り
5位	SNS	危険	個人	危険	顔	位置	SNS	自分
6位	顔	自画撮り	SNS	人	個人	友達	個人	友達
7位	個人	個人	悪用	ライン	住所	個人	人	人
8位	名前	情報	位置	顔	位置	自分	顔	危険
9位	情報	場所	住所	個人	自画撮り	人	住所	個人
10位	ツイッター	人	注意	自画撮り	画像	危険	位置	位置

※()は頻出語数

表5 「これから気を付けたいこと」における学年・男女の頻出語

	1年(205)		2年(203)		3年(243)		全体(672)	
	男子(110)	女子(95)	男子(104)	女子(99)	男子(115)	女子(128)	男子(343)	女子(329)
1位	個人	SNS	SNS	写真	写真	SNS	情報	SNS
2位	SNS	人	情報	情報	情報	写真	SNS	写真
3位	情報	個人	個人	個人	自分	自分	写真	情報
4位	人	写真	自分	SNS	位置	人	自分	人
5位	顔	情報	写真	人	ツイッター	個人	個人	個人
6位	自分	ライン	ネット	位置	人	情報	人	自分
7位	写真	自分	顔	友達	SNS	トラブル	位置	トラブル
8位	住所	トラブル	住所	トラブル	個人	使い方	ツイッター	使い方
9位	友達	ネット	注意	自分	相手	顔	顔	友達
10位	インスタ	悪用	便利	投稿	GPS	危険	友達	利用

※()は頻出語数

4. おわりに

以上より、自画撮り被害の予防に焦点をあてた情報モラル教育である本実践は、中学生に適切であるといえ、特に3年生及び2・3年生の女子に効果が高い内容であることが示唆された。そのため、女子の仲間関係をよりよくするために教育相談の一環として、また総合的な学習の時間や特別活動、道徳における情報モラル教育として、さらには所持率が97%になる高校の入学前の予防教育としても本プログラムは意義があると考えられた。その実施においては、学内で指導ができない場合は、本実践のように地域にいる人材として情報学を学ぶ、あるいは「情報」の免許取得を目指す教職課程学生もその対象となり得ることから、「チームとしての学校」(文部科学省, 2015)として協働できる可能性があるといえよう。

今後は、学年に応じた内容の工夫、正しい知識・スキル・行動を共有しあうピア・エデュケーションのプログラム、といった観点から教育効果を検証することが課題である。その際には、心理学の指標を用いた尺度でその効果を検証することが求められる。さらには、生徒への教育の在り方として、情報モラル教育の充実(文部科学省, 2016)や「チームとしての学校」(文部科学省, 2015)を鑑み、学校教育目標や生徒の課題と実態、ニーズ、発達段階を考慮し、地域社会の人材を活用する連携から情報モラル教育の在り方と校内体制の

構築を検討する必要もあると考えられる。

謝辞

本実践報告は、第 3 筆者が東京情報大学総合情報学部にて提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものです。研究にあたり、ご協力いただきました中学校の先生方・生徒の皆さまに心より御礼を申し上げます。また統計的検定についてご指導ご助言をくださいました東京情報大学内田治先生にも感謝を申し上げます。

引用文献

- 榎本淳子（2000）「青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連」、『教育心理学研究』第 48 号 4 巻，444－453.
- 警察庁（2019）「平成 29 年における SNS 等に起因する被害児童の現状と対策について」，
Retrieved from https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/H29_sns_shiryo.pdf
- 警察庁・文部科学省（2019）「夏休みを迎える君たちへ～ネットには危険もいっぱい～」，
Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afield_file/2017/06/27/1386963_1_1.pdf
- 文部科学省（2015）「チームとしての学校としての在り方と今後の改善方策について（答申）（中教審大 185 号）」， Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm
- 文部科学省（2018）「スマホ時代のキミたちへ＜小・中学生用＞」， Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/taisaku/taisaku2016/___icsFiles/afieldfile/2016/02/29/leaflet_juniorcolor.pdf
- 内閣府（2017）「平成 30 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果（速報）」， Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h30/net-jittai/pdf/sokuhou-.pdf>
- 西野泰代・原田恵理子・若本純子（2018）『情報モラル教育 知っておきたい子どものネットコミュニケーションとトラブル予防』 金子書房
- 酒井郷平・塩田真吾（2018）「中学生を対象としたインターネット依存傾向への自覚を促す情報漏らす授業の開発と評価：子ども自身による「インターネット依存度合い表」の作成を通して」、『コンピュータ&エデュケーション』第 44 号，42－47.
- 酒井郷平・塩田真吾・江口清貴（2015）「トラブルにつながる行動の自覚を促す情報モラル授業の開発と評価 ―中学生のネットワークにおけるコミュニケーションに注目して―」、『日本教育工学学会論文誌』第 39 号，89－92.
- 玉田和恵（2018）「情報モラル問題解決力を育成するためのグループワークの指導効果」，『江戸川大学の情報教育と環境』 Information 15，15－2